

書 評

村中知子著 『ルーマン理論の可能性』

春 日 淳 一

1. はじめに

一昨年（1995年）、ルーマンの主著『社会システム』（1984）の邦訳が完結し（佐藤勉監訳『社会システム理論』（上・下）恒星社厚生閣）、わが国におけるルーマン研究のいわば正面入口がようやく整備された感がある。ところがこの主著はルーマンの本としては珍しくもないのだが、原著で675ページ、訳書では約1000ページというボリュームをもつ。分厚くても斜めに読める本は結構多い。しかし、ルーマンの本の斜め読みなどできる者がいるだろうか。気になりつつも躊躇している人々を誘うには、重々しい正面入口の前に親切な案内所を設ける必要がある。今回の村中氏の著書は、この案内所（書）をめざしたものであり（同書226ページ）、『社会システム』の翻訳に参加された著者は案内人としてまさにうってつけと言えよう。

本書の最大の貢献は、旧来の理論との違いをきわだたせるなかで、ルーマン理論の全体像を簡潔に描写しようとした点にあると思われる。初期のルーマン理論については青井秀夫氏の丹念な紹介論文（「ニクラス・ルーマンの『機能的システム理論』について」岡田与好他編『社会科学と諸思想の展開』創文社、1977）が評者の印象に強く残っているが、その後20年近く経過したいま、理論の新しい到達点に立った紹介が待ち望まれていたところでもある。ルーマン理論に言及した著書・論文は近年かなり目につくようになったものの、論者それぞれの文脈で断片的に取り上げられ、しばしば一方的な評価を下される傾向にあったから、村中氏の著書はわが国初の本格的な研究書としての期待も担っている。

著者によれば「ルーマン理論は、従来人間主義に依拠したイデオロギー的断罪

とルーマンの専門用語の渦に巻き込まれた難解な議論との間で引き裂かれ、等身大のルーマン像が見失われてしまっている」ので、「理解可能な用語を用いて、ルーマンをできるかぎりわけのわかるものに」することが本書の課題であるという(iiページ)。評者は、「ルーマンには、人間を軽視するどころか、……現代社会で生きていかざるをえない人間のそもそものいとなみにもとづいて、社会と人間の関係を理論化しようとする透徹したまなざしがある」(iiiページ)という判断とともに、著者の課題設定に全面的に賛同する。この課題がどのようなかたちで実行されるのか、まずは目次に沿ってみたい。

2. 本書のあらすじとコメント

第一章「社会学におけるルーマン理論」では、日本の社会学界でルーマン理論がまだ正当に評価されていない理由として、①理論そのものの難解さ(これはルーマン自身が認めている。たとえば『社会システム』邦訳の「日本語版への序文」末尾を参照)、②初期の紹介者による偏ったイメージ付与(たとえば、ルーマンはあらゆる根拠づけを拒否しているなど)、③社会学における統一的理論の断念、をあげたのち、これらを克服して彼の理論提案を真摯に受け止めるべきだと著者は主張する。そのさいまず、ルーマンのめざす統一のアプローチを「方法としては機能主義を使い、理論枠組みとしてはシステム理論に依拠する」(10ページ)ものにとらえ、この統一的アプローチが「社会学にとって、いかなる成果をもたらすのか」、いいかえるとルーマンの「自己準拠にもとづくオートポイエシス・システム理論」が社会学理論の新展開を約束するかどうか、という問題に的を絞って論じることを予告する。

第二章「システムとはなにか」は、ルーマンのシステム概念の特徴把握にあてられる。ここでは、「システムのもっとも基礎的なオペレーションを把握するための前提概念」としての「複合性」の縮減と、その背後にあるものごとのコンティンジェンシー(=表に出なかった他の可能性の存在)から説き起こし、複合性の落差によって環境から区別されるシステム(システム/環境-差異)、さらには要素レベルに踏み込んだ自己準拠的オートポイエシス・システムへと概念展開を跡づける。自己準拠的システムの(作動上の)閉鎖性と(環境に対する)開放性に注意を促したあと、「意味」を用いて複合性縮減と自己準拠をなす二種のシステムすなわち心理システムと社会システムを区別しつつ関係づけることによって、「人間は社会の構成要素ではなく、その環境である」というルーマンの(しばしば曲解を招いた)言明の

真意を明らかにする。すなわち、「人間のすべてがすでに社会に折込済みであるという把握がなされえないからこそ、人間は社会のたんなる構成要素ではなく、環境でなければならないのである。人間を環境と把握することによってはじめて、……人間の主体性が生かせる理論構想になっている」（53ページ）のであると。

以上、第二章のまとめは第一章と比べかなり骨が折れた。その理由はやはりルーマン自身の叙述の（読み手から見た）錯綜にある。たとえば、本章の「システムの閉鎖性と開放性」の説明がいまひとつ分かりにくいのも、原典（『社会システム』11章7節）の著しい不透明性を解消し切れなかったためであろう。また村中氏は『社会システム』のごく初めのほうに出てくるシステム区分図（訳2ページ）にもとづいて本章後半の話を進めているが、ルーマンは説明抜きで図を掲出している。なぜ、システムは機械・有機体・社会システム・心理システムに区分され、なぜ、社会システムは相互作用・組織・社会に区分される（されねばならない）のだろうか？ 自己流の説明がつけられぬわけではない。しかしそれでよいのだろうか。

第三章「自己準拠」は、ルーマン理論の根本概念ともいべき自己準拠概念の解説である。そこではまず、理論（観察）の自己準拠と観察対象の自己準拠が区別される。前者は「理論がその理論自体をみずからの固有の対象として見いだす」（『社会システム』訳 xi ページ）ことであり、そうすることによってのみ、その理論は普遍性を要求する。ルーマンの自己準拠的システムの理論は、「その（観察）対象が自己準拠しているものであることを認めて、理論構成をはかること」、また「そうした対象を観察して理論を産出している一専門分野のシステム（社会学）も、自己準拠的に作動しているシステムであることを視野に入れること」、この二重の意味で自己準拠を組み込んでいる（70-71ページ）。

本章の第二節から第七節までは、『社会システム』第十一章「自己準拠と合理性」の第一節から第八節に沿った解説であり、とりわけ自己準拠の「自己」をシステムの要素（社会システムのばあいはコミュニケーション）、システムの過程、システムそのもの、とそれぞれとることによって、三種の自己準拠が区別される点は重要であろう。著者の努力によってルーマンの叙述の不透明さはある程度解消し、彼が「社会を論ずるさいにも、さまざまなかたちで現われる自己準拠という事態から目をそらすことなく、これと真正面から取り組まねばならない」と主張していることは分かるのだが、「それにしてもルーマンはなんでこうもむずかしい言い方をするのだろう」という疑問は相変わらず消えないままである。

第四章「方法としての機能主義」では、ルーマンの用いる機能主義的方法の内実、およびこの方法とシステム理論との関係が検討される。機能主義的方法に対しては、因果的説明を保証するかという疑念や、体制擁護的だとする批判が投げかけられてきたが、ルーマンは方法と理論を峻別することによってそれらを克服しようとするところをみる。具体的には、「機能主義を因果科学の枠内で理解することから脱却させて、……逆に因果的説明を機能的説明の一種であると把握する。……そのばあいの機能的な方法とは……索出的な比較の方法として特徴づけられ、現存するものを、別様にもありえたものと、不可視であったものという複合的なコンティンジェンシーの相のもとで把握しようとする科学分析の方法である」(102ページ)。本章ではこの方法について「等価機能主義」を中心にルーマンの関連諸著作を参照しつつ解説したのち、システム理論が機能的な方法それ自体からは獲得されえなかった問題定立や分析結果を濃縮し具体化するための要因を有していることを示す。システム理論と機能的な方法をつなぐリンクが「コンティンジェンシー」であることに注意すれば、「等価機能主義」が初期の理論提案であることもあいまって、難解さは多少やわらぐようである。なお最後の第四節では、意味の三次元（事象次元・時間次元・社会的次元）が『社会システム』第二章「意味」の第六節に沿って説明される。評者の感触にすぎないが、この三次元区分は応用範囲の広いすぐれたアイディアである。

さて、第四章までをいわば道具の準備にあてた著者は、第五章「社会システム理論—行為理論を超えて」でいよいよルーマンの「社会システム理論の中身を総括的に展開する」。「ルーマンはパーソンズ理論を起点とし、パーソンズ以後断念されている社会学における統一的理論を彫琢するその過程で、自己準拠概念の精緻化に成功し、コミュニケーションを基軸としたオートポイエシス的なシステム理論へと脱皮を遂げた」(132ページ)とみる著者は、ルーマンが社会システムの要素をパーソンズ流の「行為」から「コミュニケーション」へと変更したいきさつから出発する。ルーマンは、コミュニケーションを「情報・伝達・理解という三つの選択の総合が自我と他我において繰り返されること」として把握し、「コミュニケーションを社会システムの再生産の要素に、行為を社会システムの自己観察の要素として、その双方を取り込んで関係づけることにより、従来の行為システム理論を社会システム理論として刷新する途を拓いている」(135ページ)。このあたりまでは評者もなんとかついていけるのだが、なぜ行為でなくコミュニケーションなのかという決定的な説明がルーマンにも本書にも見いだせない。じっさい、『社会システム』第四章の叙述

は読み手をいろいろさせるに十分である(たとえば、訳書 260-261ページ)。同章のおわりには「以上の考察により、社会システムが何から成り立つのかという問いに対して、二重の解答が与えられている。すなわち、コミュニケーションからとする解答とコミュニケーションが行為として帰属されることからとする解答である」(訳 276ページ)と書かれているが、「根気、空想力、手腕、好奇心」(訳 xviiiページ)の持ち合わせが足りない評者には、またしても「なんでこうもむずかしい言い方をするのだろう」との疑問がよぎる。村中氏の著書でも、残念ながらこの錯綜は解きほぐされていないように思われる。ちなみに評者自身は、「コミュニケーションを要素とすることで、今まで見えなかったもの・不鮮明だったもの(たとえば、人間が社会システムの環境であるという事実)がはっきり見えてくるから」とごく単純に理解しているのだが、これではいけないのだろうか。

第五章第二節では、相互作用状況にみられるダブル・コンティンジェンシー(自分がどう出るかは相手の出方次第であり、相手から見ても同様に言えるので、そのままでは両すくみになるという事態)の問題をルーマンがどのように解決したかをパーソンズとの対比で説明する。要するに、「価値の共有」というパーソンズの解決策は社会・文化的進化に余地を与えないきわめてローカルかつ短絡的なものであるのに対し、ルーマンはダブル・コンティンジェンシーがあり当事者双方がブラック・ボックスであるからこそ、偶然のきっかけから相互作用がスタートしうるのであり、一旦スタートすれば、あとは双方の行為の履歴とそのつど更新されるダブル・コンティンジェンシーのもとで相互作用が積み重ねられていくと考えるのである。まさにダブル・コンティンジェンシーを逆手にとった解決策と言えよう。続く第三節は、主として『社会システム』第八章「構造と時間」に沿って、構造・過程・期待・パースン・役割・プログラム・価値・行動期待の一般化といったルーマン理論の基礎概念を提示する。これらの概念自体は「社会システムの理論としての社会学」(1967)や『法社会学』(1972)以来おなじみのものであり、初出文献と併せて読むのも一法であろう。

問題は最後の第四節である。そこでは『社会システム』第十章に沿って、社会(ゲゼルシャフト)と相互作用という二種の社会システムの違いが明らかにされるはずなのだが、村中氏によって原典の複雑性は手の届くレベルに縮減されたと言えるのであろうか。評者には、ルーマンが行為とか相互作用といった旧来の社会学の概念との接続にこだわりすぎて、かえって話を分かりにくくしているように思えてなら

ない。初学者がまず知りたいのは、旧概念との関係云々よりも、とにかく行為でなくコミュニケーションから出発するとして、それで社会と人間にかんして新たに何が見えてくるのかという点のほうではなからうか。いかなる読者を想定するかによるが、機能分化、コミュニケーション・メディア、サブシステム等を取りあげた本節後半部分がむしろ肝心であり、前半の社会と相互作用の区別にかんする議論は後回しでもよかったのではないか。そのことは別にして、「コミュニケーションについての綿密な分析に比して、システム間関係についての(ルーマンの)分析はいまだしの感をいなめない」(187ページ)という村中氏のコメントには評者も同感である。

最終第六章「ルーマン理論の可能性」は、「ルーマンの試みを社会学理論の刷新という観点からどう評価するか」にかかわる。著者によればルーマン理論の特徴は、①パーソンズ以後断念されていた社会のグランド・セオリーへのオリエンテーションを再生した点、②システム/環境-差異から出発し、自然や人間を社会の環境とはっきり位置づけることによって、社会学が自然や人間をいかに扱うべきかを示した点、③時間的な変化をも含めた「差異」を理論に組み込むことで「人間性とか道徳などの価値過重な概念に依存せずに、社会とそこで生活する人間のいとなみを現実にくくして捉えようと」(206ページ)した点、にあるという。

社会学理論への貢献という面では、①社会的なものに関わるほぼすべての基礎概念を相互に関係づけて精緻化したうえ、自己準拠、オートポイエシスをはじめとする多数の新概念を導入し、それらを駆使して社会的なものの総体の解明を企図したこと、②自己準拠概念の導入によって、システム概念を社会それ自体に適用可能なものにするとともに、従来の議論の弱点を明らかにしたこと、③意味概念を価値・規範と関係づけて徹底的に考察したこと、④構造概念の再解釈を通じて社会変動論を新たに準備したこと、があげられる。

こうした評価に立って著者は、残された課題として「ルーマン理論にもとづいた現代社会の実証的な研究」の必要性を説く。さらに、そこへいたる準備段階では、従来の行為理論の射程外にあった「コミュニケーションには関わるが一人でおこなう行為の領域」の理論化も求められているという。

評価や課題はひとそれぞれでありうるから、著者のそれに異議を唱える向きもおそらくあるだろう。しかし、評者個人としては村中氏の評価におおむね同意したい。というのも、その評価がルーマン自身のめざしているところをほぼ正確にとらえた

うえでなされていると考えるからである。「ルーマンは…日常的なきわめてノーマルな事態を起点に、社会の不確実性の把握に挑んでいる」（212ページ）のであって、けっして（わが国にもまだ棲息している）たんなる無根拠性や相対主義の称揚者ではないし、ましてや「人間軽視のテクノクラート」などではありえない。

3. 本書の意義

以上は、本書の内容の複雑性を評者流に縮減したものである。では、全体を通じて著者は「理解可能な用語を用いて等身大のルーマン像を描く」という当初の課題を達成したのであるか。これもあくまで評者の判断ではあるが、「等身大のルーマン像を描く」ことにはかなり成功したのではなかろうか。すなわち、従来の断片的な紹介・評価とは異なり、主著を軸にしてルーマンの理論の全貌を見渡すことで、誤ったレッテルをはがし、より正確な理解に近づけたと言えそうである。しかし、「理解可能な用語を用いて」という点になると、対象読者にもよるが判断がむずかしくなる。これは前述のように、ルーマン自身の叙述の難解さに起因するところが大きい。分かりやすくしようと思えば自己流の解釈が不可避となり、誤読のリスクが増すというジレンマに陥るのである。とはいえこうした困難は、本書のような地道なルーマン研究が積み重ねられることによって、少しずつ取り除かれていくに違いない。本書を手がかりにして、「ルーマン理論のもつ豊かな問題性が一人でも多くの社会(科)学者に共有され」（226ページ、（ ）内は評者の付加）ることを著者とともに願っている。

（恒星社厚生閣，1996年1月刊，A 5判，v + 229ページ，3,605円）